



Effectiveness of a co-production with dialogue program for reducing stigma against mental illness : a quasi-experimental study with a pre- and post-test design

中西, 英一

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2023-09-06

(Date of Publication)

2024-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3433号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485864>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文の内容要旨

氏 名 中西 英一

論文題目

Effectiveness of a co-production with dialogue program for reducing stigma against mental illness: a quasi-experimental study with a pre- and post-test design

(精神疾患に対するスティグマを軽減するための対話を伴う共同制作プログラムの効果：事前・事後テストデザインによる準実験的研究)

精神障害者に対するスティグマは、精神障害者に対する偏見・差別を表す。スティグマは一般人や医療従事者、学生にも存在する。またスティグマを内在化することをセルフスティグマといい、精神障害者は自尊心の喪失を経験する。スティグマやセルフスティグマは精神障害者が日々の生活を困難にする因子であることから、スティグマやセルフスティグマを低減することがリカバリーのために必要である。スティグマを効果的に低減するためには、精神障害者の回復が感じられ、精神障害者との接触体験、精神障害者との共同作業などを含む新しいプログラムが必要である。

本研究はスティグマ低減のための対話を伴う共同創造プログラム（Co-Production with Dialogue Program for Reducing Stigma: CPD-RS）を開発し、学生の精神障害者に対するスティグマと精神障害者のセルフスティグマ低減効果を検証することを目的とした。

研究デザインは対照群のない前後比較研究である。参加者は作業療法学科の学生 28 名と地域在住の精神障害者 20 名。各グループは学生 2-3 人と精神障害者 2 人で構成し 10 グループに分けた。CPD-RS は学生と精神障害者が日常生活をテーマに対話し共創を通じてポスターを作成し、グループ全体で発表したあとグループで振り返りを行うという構成である。プログラムを通じて参加者が尊厳のある個人として相互理解を促し、精神障害者に対する学生のスティグマや精神障害者のセルフスティグマが低減すると考えた。日本語版 Link スティグマ尺度（DDS）（下津他, 2006）を用いて学生のスティグマと精神障害者のセルフスティグマを評価した。DDS は合計点が多いとスティグマが高いことを示す。また CPD-RS での主観的体験を評価するために介入後アンケートを実施した。アンケートは 6 つの項目（プログラムの楽しさ、自己表現、生活の対処、自分自身の他者への影響、他者からの自分自身への影響、プログラムについて人に話す）を 5 段階のリッカートスケールに記入し、加えて自由記述回答を求めた。

この研究は、ヘルシンキ宣言に従い、藍野大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 2018-21）。介入は、参加者から書面による同意取得後に実施した。参加希望した人には、参加は任意であり、いつでも不参加にできることを伝えた。

学生の DDS 合計点の平均は介入前後で有意に低減し、1 ヶ月後も低減が維持された。精神障害者の DDS 合計点の平均は介入前後で有意な変化はなかった。介入後アンケートではリッカートスケールの合計点の中央値が学生、精神障害者ともに 3.5 以上であった。自由回答では学生・精神障害者ともに「生活の悩みについて話すことができ、同じような悩みを抱えていると感じた。」と生活上の問題が共通していると述べた。

CPD-RS は学生のスティグマを低減し、学生と精神障害者の相互理解を促進させることが示唆された。学生の DDS の合計点の平均が有意に低下したのは、共創と対話によってリカバリー志向で相互協力を促進したことにあると思われる。また精神障害者の DDS 合計点の有意な低減がみられなかったのは精神障害者にポジティブなフィードバックが十分ではなかったことが影響したと推測した。また実施後のアンケートから CPD-RS が学生と精神障害者の生活の問題解決が同じという理解を示し、参加者が安全で楽しい体験となったと理解された。CPD-RS を通じて学生と精神障害者が相互に尊重した理解を育むことができる可能性を示唆している。

(別紙 1)

論文審査の結果の要旨

氏 名	中西 英一		
論文題目	Effectiveness of a co-production with dialogue program for reducing stigma against mental illness: a quasi-experimental study with a pre- and post-test design (精神疾患に対するスティグマを軽減するための対話を伴う共同制作プログラムの効果：事前・事後テストデザインによる準実験的研究)		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	橋 本 健 志
	副 査	教授	古 和 久 朋
	副 査		印
要 旨			
<p>本研究は精神障害者へのスティグマ、セルフスティグマの低減を目的として、対話を伴う共同創造プログラムを開発し、その効果を検証した。</p> <p>具体的には作業療法学専攻の学生 28 名と地域在住の精神障害者 20 名を 10 グループに分け（各グループは学生 2～3 名と精神障害者 2 名で構成）、各グループは日常生活をテーマに対話し共創を通じてポスターを制作し、全体で発表したのち、振り返りを行うというプログラム介入を行い、その前後で評価した。結果、学生の日本語版 Link スティグマ尺度(DDS)が介入後に有意に減少し、またその効果は少なくとも 1 ヶ月間持続した。本研究の対話を伴う共同創造プログラムはオリジナリティーがあり、また、これまでにスティグマの減少効果の持続について介入研究の報告はほとんどなく、新規の知見を得た。</p> <p>本研究は、多くの疾患のスティグマ克服を目指す上で非常に有益なエビデンスを提供するものであり、その意義は極めて大きい。</p> <p>よって、学位申請者の中西英一氏は、博士（保健学）の学位を得る資格があると認める。</p>			
Effectiveness of a Co-Production with Dialogue Program for Reducing Stigma against Mental Illness: A Quasi-Experimental Study with a Pre- and Post-Test Design. Eiichi Nakanishi, Masahiro Tamachi, Takeshi Hashimoto. Int. J. Environ. Res. Public Health 19(21), 14333, 2022. DOI: 10.3390/ijerph192114333			